

4.1 他大学の取り組みについて

プール学院大学 学生支援G P 2007－2010 年度 「発達障害を有する学生に対する支援活動」についての報告

プール学院大学は、「発達障害を有する学生に対する支援活動」というテーマで、2007年度から2010年度までの4年間、文部科学省の学生支援G Pに採択されている。この事業を進めるプール学院大学は、ノーマライゼーションの理念に基づけば、高等教育の均等な機会を発達障害に苦しむ若者たちにも提供すべきと考えている。一方で、発達障害を抱える学生は、学習、対人関係、進路選択において困難を抱えることも多く、なんらかのサポートがないままに放置されてしまうと、留年、退学、進路未決定の状態での卒業につながっていく可能性があるという。本学生支援G Pの概要は以下の三つからなる。

(1) 発達障害を有する学生の支援（特別支援プログラム）

発達障害等を理由に大学に支援を申請し、大学から特別な支援が必要であると承認された学生（特別支援対象学生）に対し、入試から卒業まで一貫して提供する支援プログラムが提供される。まず、学生が抱える課題を軽減するために、「個別の教育支援計画」が策定される。学期ごとに、支援の結果評価、学生の課題についてアセスメントの見直し、個別の教育支援計画の改定が行われる。この支援は学生支援センターに配置されている特別支援コーディネーター等のスタッフが中心となって行われるが、医務室、学生課、キャリアサポートセンター、カウンセリングルーム、図書館といった学内組織および医療や就労支援機関といった学外組織がさらにこれをサポートしている。支援内容としては以下の項目が設定されている。

- (a) 個別の教育支援計画の策定
- (b) （関連部署に）共通理解を求める文章の配布
- (c) 履修指導
- (d) 学習支援S A（スタディ・アドバイザー）によるサポート
- (e) 定期試験での配慮
- (f) 学生支援センターでの個別支援（スタディスキル・コミュニケーションスキル）
- (g) 学生支援センターでのソーシャル・スキル・トレーニング汎化プログラム
- (h) インターンシップの設定

(2) 特別支援教育を担う人材の養成

通常の学級で特別支援教育を担える人材の育成は、初等、中等教育レベルでも急務という観点から、子ども教育学科、国際文化学科、英語学科に、「特別支援教育」の授業科目を導入している。また、特別支援ピア・サポーター養成講座を開設している。ここで学生た

ちは、同じ年代の仲間として、大学生活に困難や不安を感じている他の学生に対して支援する方法を学ぶことができる。

大学関係者は、さまざまな職務に追われ、支援を要する学生に多くの時間や労力をさけなくなっている。一方で、学生たちは困った時に友人に相談するケースが多い。そういつたことから、支援を必要とする学生に対して、特別支援ピア・サポーターとしてトレーニングを積んだ学生を人的資源として提供することは有効な手段と考えられている。

（３）ユニバーサルデザインとしての学びの支援体制構築

本事業は単に発達障害を有する者に対する特別支援教育というだけに終わらず、より根本的に「人間が言語の違い、左右の利き手の違い、障害の有無、老若男女といった差異を問わずに利用することができる設計・工業デザイン（ユニバーサルデザイン）」の理念を大学教育に導入することを目指している。学長の木村一信氏は報告書の巻頭言で、「若者たち自身が、学校、保護者、友人、社会とどのように相対していくのか、そこで問題を抱える人たちはどのようにその困難や壁と対処すればいいのか、そしていかに「自立」へと進んでいけるのか、などの課題も考え合わせると、発達障害を有する学生の学習・社会面の課題はまさに全ての若者の課題であると言えなくもありません」と述べている。

南雲紳史 委員

広島工業大学 「技術系女子学生の継続的なキャリアデザイン」(2007～2010 年度)

(1) プログラム作成の背景

2003 年 運営計画で女性技術者育成の取り組みを取り上げる。

2006 年 女子学生数を 20%にするプロジェクト開始

2007 年 女子学生キャリアデザインセンター（JCD センター）設置，学生支援 GP 採択

(2) プログラムの目的

1. モチベーションの維持・向上
2. 技術者としての素養を身につける
3. 就職に際してのミスマッチと早期離職の防止
4. 就業環境について考える
5. 埋もれていた人材の発掘

(3) プログラムの概要

女子学生のライフステージに対応した 3 つの柱

1. キャリア形成支援（JCD センター企画セミナー、学生自主企画セミナー等）
2. 就業支援（女性技術者に対する企業の開拓、就業環境の提案等）
3. 再チャレンジ支援（卒業生のキャリアパス調査、スキルの再教育等）

(4) コメント

工科大系大学において女子学生の支援拠点として JCD センターを常設するような取り組みは珍しく、様々なイベントや講習会・セミナーを実施し、就職先の開拓にも力を入れている点も興味深い。女子学生数が少ないことで、かえってイベント等に参加した際には縦のつながりも作りやすく、特に 1、2 年生にとってはメリットは大きいと思われる。一方、女子学生の就職率の経年変化についてのデータは報告書にも HP にも掲載されておらず、本 GP の就職への効果は不明である。2011 年度の女子学生比率は全学で 5.7%（工学院大学は現在、全学で 11.5%）とプロジェクト立ち上げ時からほとんど変化はなく、女子学生を増やす直接的な効果もまだ途上と思われる。

また、本 GP 期間では男子学生を交えた取り組みはなされておらず、男子学生への波及効果や全学に対するメリット・デメリットなどについても一切触れられていない。男子学生数が圧倒的に多いだけに、この点についても知りたいところである。

中島裕輔 委員

島根大学 「学生の自主的活動の評価と教育効果の向上」

■目的

地域と緊密な関係があり学生のボランティア活動参加率は約5割程度あったが、学内では評価されないことで減少傾向にあり、コミュニケーション力の欠如につながっている。正課以外の活動をポイント化し、インセンティブを与えることで参加意識の高揚、課外活動と成績との関連を明らかにする。

■概要

電子カルテを活用した組織的・総合的な支援が中心。
大別して以下の7項目から構成されている。

- ・インセンティブポイント制度
- ・ガイダンスのweb配信
- ・学生電子カルテによる総合的な学生支援
- ・スタッフの能力・資質向上
- ・学生スタッフによる支援活動
- ・健康管理システムの開発
- ・学生相談FAQシステムの開発



■内容

採択の大きな理由として、インセンティブポイント制度がある。これは、正課以外の諸活動への参加者に対してインセンティブポイントを学生証（ICチップ付）に付与するというもの。積極的に課外活動等を評価し、参加を誘導し、人間力の涵養や就職率の向上につながることを目的としている。ポイントは「学生電子カルテ」システムで参照でき、成績・履修登録状況などとあわせて一元的に管理できる。ポイント付与の対象となる活動はボランティア、サークル活動、ガイダンス、学内委員、研修・セミナーなどで、たとえば入学ポイント100、災害支援70、学内ボランティア20、サークル活動50など。1ポイント1円換算で、生協売店において学用品、書籍と交換できる。

■所見・課題

システムに対する学生の評価としては肯定、否定、制度を知らないが約2割ずつ、どちらでもないが約3割。ポイントと取得単位数を比べると比例関係にあり、逆に休学者・退学者はほとんど課外活動を行っていないことが分かった。

山本崇史 委員

富山工業高等専門学校 「遊-友-You プロジェクト」

1. 概要

富山工業高等専門学校は、本科生 806 名、専攻生 49 名であり、女子約 20%、寮生約 20%である。

なお、現在は、富山商船高等専門学校と併合し、富山高等専門学校と改称している

2. プロジェクトの目標：

「富山高専を活みなぎる元気な夢実現集団にする」

3. 課題と原因

入学当初の元気が徐々に失われてゆくことが課題として認識された。その原因として

- ・詰め込み教育、知育偏重境域
- ・元気な学生とそうでない学生の学業面での差がでてくる
- ・学業面での疲弊による小グループ化、個人主義

がある。

4. 施策

4.1 概要

「遊・友・Y o u」をキャッチフレーズとした。

それぞれ、

「遊」：遊びを通じて自分を表現

「友」：ホンネで語ることで、信頼、理解

「Y o u」：ピアサポート、アドバイスのいる、Y o uと呼べる関係の実現を意味している。

4.2 具体的な対応

特徴的なものは以下の通り。

(1)KOSEN cafe (談話ホール)の設営

放課後時間帯に設営するカフェ形式の談話スペースである。運用当初は、マスター（教員）、カウンセラー、事務員が配置された。のちに学生チュータも配置された。ここでは、遊びを通じた学生への呼びかけや、月 1 回イベントを企画し、参加者のすそ野を広げる活動を広げるとともに、イベント以外でもカウンセラーや先輩学生にいつでも相談できる環境を作ることを目指した。

(2)カウンセラーによる学生相談機能の充実

- ・従前の学生相談室（クローズ環境）に加え、次の施策が行われた。
 - KOSENcafe(4 日/週)：オープンスペースなので話し相手となる
 - 寮 (4 日/週)：特に女子寮生への対応
 - ホームルーム：心理講座を開講。人間関係への気づきを与える

(3)リーダーの養成

学生間の人間関係や信頼関係を向上させ、学校行事に積極的にかかわる意識向上を目的に、リーダー研修会、幹部寮生研修旅行（他高専との交流）、2 年生の合宿研修を実施した。

5. 効果と課題

5.1 効果

特に部活に参加していない学生よりどころ、学科の異なる学生間の交流がみられた。
教員やカウンセラーが身近に感じられた。

リーダー意識が醸成された
などが効果として現れた。

5.2 課題

カウンセラーの力が不可欠であるが、カウンセラーを継続的に雇用出来るかどうか
問題とされている。

6. 所感

年齢層が低い、寮の存在など、ここでの施策そのまま本学に適用できるものではない
が、普段の談話室機能とイベントの結合は注目できる。

水野修 委員

国立大学法人北見工業大学

「夢を育む e-学生支援」(2007～2010 年度)

概要

北見工業大学では「自然と調和するテクノロジーの発展を目指して」というスローガンで教育研究活動を展開するとともに、「学生のニーズを正確に把握し、入学から卒業に至る学習・研究および生活のすべての面で支援体制を充実・強化させることにより、すべての学生が快適な学園生活を享受できる環境を作り出すよう努める」ことを目標としている。これに加え、さらなる学生支援の充実を目指して「夢を育む e-学生支援」に着手し、主に「個別担任制を全学で実施」、「電子ポートフォリオで学生の情報を共有」、「ピア・サポートや SNS の立ち上げ」などに取り組む。

詳細

・個別担任制

教員 1 名が 1 学年あたり概ね 5 人の個別担任となり、半年ごと、成績を手渡す際などに面談を行う。欠席が多い学生は随時面談を行う

・電子ポートフォリオ

セキュリティの観点から、インターネット接続のない、ポートフォリオ専用のネットワークを学内に立ち上げ。学生基本情報、成績情報、出欠情報、面談記録、学習教育目標の登録、閲覧を可能にした。

・SNS

OpenPNE サーバを導入して SNS を構築。詳細が記述されていなかったが、mixi のようなサイトが構築でき、日記やコメントを残せるらしい。3 年間で累計登録数 500 人、総アクセス数 50 万回。

・ピアサポートシステム

30 名程度の学生がカウンセラーから研修を受けた後で、ピアサポーターとして登録、その後ピアサポーター室で学生の相談に乗っている。

効果

・個別担任制と電子ポートフォリオ

大学のシステムとして構築されたのは大きい。アンケートでも高評価。

・SNS とピアサポート制度

登録学生数が少なく、認知度が低い、という問題があるようである。

所感

学生へのケア体制としては、本学で行っているものと概ね方向性は同じであるように感じた。ここで行われている「ピアサポートシステム」のような学生サポートの充実が本学でも必要になってくるであろう。

金丸隆志 委員

4.2 まとめ ～他大学の取組事例から何を見るか～

本章で取り上げた他大学での取り組みは、近年の学生支援 GP の報告書『新たな社会的ニーズに対応した学校支援プログラム事例集』平成 20 年 12 月独立行政法人日本学生支援機構 新たな社会的ニーズに対応した学校支援プログラム実施委員会 に掲載されている事例の中から、「学生の元気を育てる」という今期の自己評価のテーマに近いと思われるものである。本章で概要を紹介したものの他、委員会では松本大学松商短期大学、大阪大学についても取り上げた。これらの事例については GP の報告書より本報告書に参考資料として転載させていただいているので参照されたい。これらはいずれもそれぞれの大学の特色を生かした課題であるとともに、本学での取り組みを進める上で参考になる点がある。特にそれぞれの GP としての着眼点やプログラムとしてのまとめ方、成果の示し方など、本学で学ぶべき点であろう。

同時に具体的内容を見ると、本学でもすでに取り組んでいることや本学の取り組みがこれらと比べても遜色ない事項も少なくないことが明らかとなった。たとえば理科教室やオープンキャンパスなどのボランティアとしての学生参加は総計で 3700 名を超している。これは在籍学生数に対して 50%をこえる比率であり、実数としてみても 20%もの学生が参加しているのである。これらの学生がそれぞれの活動に生き生きと取り組むだけでなく下級生や周りの学生へ積極的な影響を与えている。われわれはこれらの点に自信を持つとともに、反面、成果を明確にして外部へ継続して情報発信する点での弱さについて反省する必要がある。